

宮城県東松島で情報誌「東松島食べる通信」を八月に創刊します。自慢の地元食材とともに季刊(税込み二千七百円)でお届けします。同様の情報誌「東北食べる通信」の市町村版としては日本初です。

「食発見は、街おこし」。食を通じて地元が、地元のもの、の価値を見直すきっかけをつくり、自信と勇気と愛情を生み出す活動を目指します。「東松島市」という全国的には知名度の低い街にも、もっとみんなに知ってほしい、もっとみんなが自慢したい、もっとみんなが大切にしたいモノと、ヒトがあふれています。

東北復興日記

101

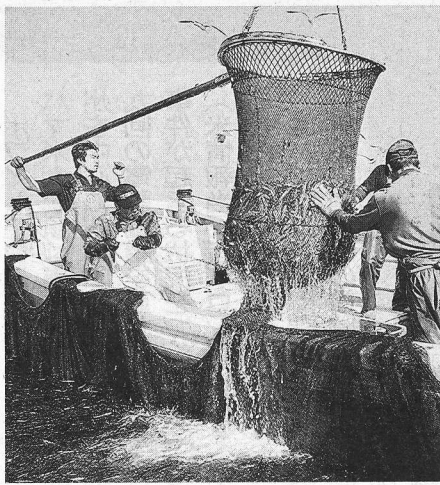


「東松島食べる通信」編集長 太田将司さん

東松島の食 共に再発見

編集長を務める私はこの出身ではなく、二〇一二年十一月から任んでいて、外からの視点だからこそ素直にたくさんの宝物が見えてきました。被災地でなく東松島市として、正面からこの街の

活動していた昨年の夏、「東北食べる通信」の高橋博之編集長と、東松島の海苔を特集する取材の過程で出会いました。その号が発刊されると、自分のことのように自慢し



たり、漁師だけではなくみんなで喜んだのです。これを東松島市でやったら、みんなに自信と笑顔と喜びが戻るんじゃないかと。

創刊号の特集は、東松島市の定置網漁師の大友康広さんと「真イワシ」。定置網漁でも捕れるか、捕れないかは全く予想がつかず、一番難しくリスクもあり、ある意味、漁師が一番燃える魚

は、読者の皆さんと一緒にワクワク、ハラハラできるのが本当に楽しみです」と言います。

読者が生産者(作る人)を知るだけでなく、生産者も読者(食べる人)を知る。共に食を再発見する。そして「東松島食べる通信」を通じて、都市と地方の人と人が食でつながり、東松島のファンが増える、そんな「食物連鎖」を生み出していきたいです。

写真。大友さんは「これまで捕れたり、捕れなかったりのドキドキは、漁師だけが共有していたけれど、食べる通信で

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。